

## リュブリャナ大学での日本語教育インターン生受け入れの事例

リュブリャナ大学文学部

守時なぎさ

リュブリャナ大学文学部アジア研究学科は1995年10月に創立され、現在日本研究・中国研究・韓国研究の三つのコースがある。日本研究コースでは、学科成立以前より日本語教育実習を教育活動の一つの柱としており、この方針は現在まで続いている。この発表では、リュブリャナ大学におけるインターンシップがどのように行われているかを概観しながら、東京外国語大学のインターン生の位置づけとインターンシップの内容をタイプ別に紹介する。

まずリュブリャナ大学で行われているインターンシップは、実施期間と内容によって次の三つの形態に分けられる。括弧内には、インターンシップのタイプ別にインターン生の派遣大学名を記す。

1. 短期集中日本語実習型（筑波大学・日本女子大学）
2. 授業編入型（東京外国語大学）
3. 通年実習型（立教大学・筑波大学）

短期集中日本語実習型は、通常2～3週間行われる。インターン生は、予め募集された日本語集中コースの受講生に対して教壇実習を行う。集中コースに出席するのはリュブリャナ大学日本研究専攻の学生や高校生、学生、一般社会人などである。このタイプのインターンシップでは、通常一週間目に中東欧の日本語教育事情について講義をしたり、日本語教育に関するコースデザインや教材開発などのワークショップを行い、翌週から教壇実習を行う。インターン生は、集中的に日本語教育実習が行え、かつコースデザインや学習目的に合わせたシラバスを考案することができるという長所があるが、海外の教育機関の実態を十分体験することは難しい。

授業編入型は、東京外国語大学のインターン生が実施するタイプである。期間は3週間で、インターンシップはリュブリャナ大学で通常の授業が行われている時期に行われる。インターン生は、まず授業を見学し、次に教壇実習を行う。このタイプの長所は、海外の教育機関における日本語教育の方法や実態をチームティーチングの一員として体験可能なことであるが、教壇実習の時間が十二分に確保できないことが難点である。

最後の通年実習型は、通常一年間に渡って行われる。このインターンシップでは、教壇実習に加えて、小テストや定期テストの作成・採点、宿題や作文の添削などを行い、学習者の習得状況も一年を通して観察することができる。また、インターン生自身が海外に長期滞在することから、学習者、また外国人としての社会的な体験も経ることになり、日本語教育、ひいては言語教育の背景を広範囲に知る機会を提供する。このタイプは日本語教育の現場を多岐にわたって体験することができるが、独自のコースデザインはできず、既存のコースで教えることになるのは短所として指摘できよう。

東京外国語大学のインターンシップに関して特筆しておきたいのは、2009年度に開始以降、これまで日本人大学院生だけでなく外国人の大学院生が数多く派遣されていることである。現在の日本語教育事情を見ると、特に海外における日本語教育機関では、非日本語母語話者の教員数は日本語母語話者の教員数をはるかに凌いでいる。リュブリャナ大学では、東京外国語大学から非日本語母語話者のインターン生を数多く受け入れることができ、日本語教育の全体像を常に再認識するという形で、日本語教育の主流となる現象に関与することができたことは非常に幸運であった。さらに非日本語母語話者インターン生は、リュブリャナ大学で学ぶ学生にも「非日本語母語話者の日本語教師」という将来像を具体的に示してきた。

インターンシップは、インターン生・学習者だけでなく、指導教員や学科の関係者にも確実に様々な教育効果を与えている。この実りあるインターンシップが、今後とも継続し、一海外教育機関として日本語教育界に少しでも貢献することを願ってやまない。